

川風情

最期の一人旅。今まで、多くの旅をしてきたが、その大半は一人旅であったから、今さら、寂しいの気持ちはないし、道連れはご法度であり、その行く末は決まっている。

なぜ、今、旅立たなければいけないのか。その原因は何か。

先ず、ポジティブに捉えると、現世に於いて相当に「徳を積んだ」から、もうこちら（極楽浄土・天国）に来てもらっても差し支えないと判断され、所謂”お迎え”が来たところと図々しく解釈する考え方。

一方、ネガティブに捉えると、現世では、全く「徳を積んでいない」し、相当に「社会の毒」となっている事実と、それに全く気づいていないことから、本来の望む処、ではないあらぬ方向（地獄）へ、その罪滅ぼしとして、導かれてしまった。と解釈する考え方。

それでも、「自分は何も悪いことはしていないはず」だから、きっと前者に違いないと思いつつ、どちらに向かっているのか、全く分からずに足を運んでいる。

歩みを進めている処は、川に間違いないようであるが、水はない。”川原”と表現するのが適切となるが、足下の全てが砂より荒く、ビー玉より細かい真っ白な玉砂利である。

もうどれだけ歩いたのか。右を見ても、左を見ても、振り返っても、前を見ても、その真っ白な玉砂利が延々と続いて、それが四方八方、真っ平に広がっていて、視線の先は地平線しかない。目的地はどちらの方向で、どの位歩けば辿り着くのか。

暑い。現世で言う”太陽”の光が強烈である。時間が無い此の地に於いての時間の感覚は、前世への未練としか言いようがないが、もう何日にも相当する時間、休まず歩いている。その間、日が暮れることは一度もなく、ますますその光が、密に強烈に感じられる。

前世では、「日の当たらない人生を歩んできた」自分にとって、なんとも皮肉だ。そうか。灼熱地獄なのか。此処は、到着地ではないし、そうしたくない。したがって、歩みを進めるしかない。現世側の観点で「川に足を踏み入れたこと」は、”死”を意味するが、今回は、この強烈な暑さにより”熱中症”で息絶えたと思ひ込み、倒れてしまった。

あつ雨だ。とても心地よい。此処は”天国の極楽”か、「ああ生き返った」と思った。暫くは、その心地よさに陶酔しつつも「此処ではない」と我に返り、歩みを再開した。

雨は降り続いた。初め、踝程度の水深が、ひざ上を越え、胸のあたりまで達した。とても歩き辛い。それでも歩みを止めずに進んだが、とうとう足が立たなくなって、泳ぐしか進む術がなくなってしまった。暫くは泳いでいたが、疲れ果てて、仰向けに浮いていた。

「畜生。今度は水地獄か」と呟いた瞬間、体が急に沈んだ。”溺死”か。もう嫌だ。

気付いたら、春の優しい日差しの中、トンビが一鳴きして遠くへ飛び去った。